

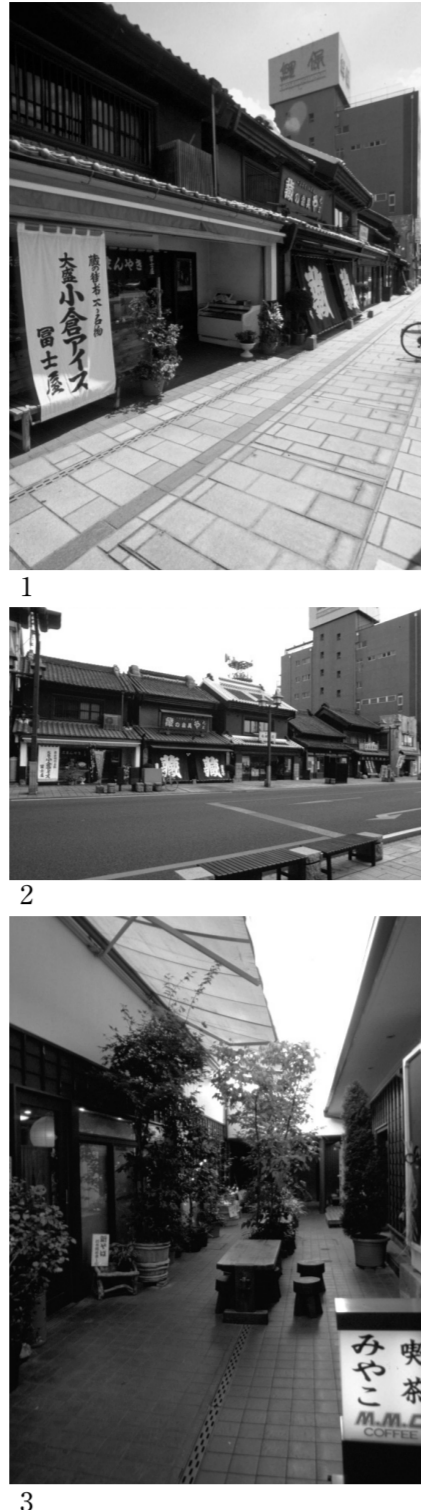


第7章 資料編

2.歴史的資産を生かした先進事例の紹介

栃木県栃木市

栃木県栃木市では、市内のさまざまなところで蔵を目にすることができる。その数は、約400棟といわれ、福島県喜多方市、埼玉県川越市、あるいは千葉県佐倉市と同様に、「蔵の町」として知られている。こうした栃木市の蔵の残存状況や現在の活用は多様である。道路沿いに主屋などほかの建物と並ぶ場合から、敷地内に独立して建つ場合まで、多くの土蔵はもちろん、倉庫として使われている。一方、万町や倭町など旧例幣使街道沿いにこびらび建っている蔵は、店舗として営業したり、観光施設となっている店蔵（見世蔵）がある(1、2)。例えば、「とちぎ蔵の街観光館」の建物は、第二次大戦前は荒物と麻を商う問屋であり、その後奥の土蔵の一部がアパートに改修されたのち、市の手による改修を経て、現在の「とちぎ蔵の街観光館」となった(3はその内部)。なお例幣使街道側に面した見世蔵は1997年に市指定有形文化財となっている。また、同じく市指定文化財で江戸時代後期の建築といわれている。「善野家土蔵(通称おたすけ蔵)」はやはり改修され「とちぎ蔵の街美術館」として使われている(4)。こうした蔵は、白漆喰で外壁を仕上げただけでなく、むしろ黒漆喰の壁とすものが多いなどの意匠的な点も特色となっている。さらに近年、二階の前面などに取り付けられていた看板が取り外され、建てられたときの外観が戻っており、まちなみとしても見栄えのするものとなった。土蔵だけでなく、博物館の「横山郷土館」として使われている建物は、麻問屋であった横山家のもので、数は少ないが石造の蔵もある(5)。このように、蔵といっても素材的に豊かである。蔵だけでなく、1921年建築の木造洋風建築、旧栃木町役場は国の登録文化財になっており(1998年登録)、現在は教育委員会が使用している(6)。この建物の前の堀



は、かつてここに県庁がおかれていたことから県庁堀と呼ばれている。こうした木造建築の例には、同じく登録文化財の栃木病院や栃木高校の講堂や記念図書館などがあげられる。

他方、旧例幣使街道と並行して流れる、先にあげた「横山郷土館」なども建つ巴波川沿いは、水辺の景観を活かし、遊歩道として整備されている。江戸時代の初期頃から、栃木と江戸方面を結ぶ舟運が交通路として利用された名残とともに、やはり栃木を特色づけている鯉が放流されているところもある。また旧例幣使街道も歴史性が認識できるように、舗装に変化をつけたりして街路整備が行われている(7)。こうして、蔵造りの建物ならぬ街路を歩いたり、あるいは巴波川に沿って遊歩道を散策したのち、蔵を増改築した蔵の街観光館などで休憩をとることができる。このような地域を特徴づける建物は、それを巡るルートなども作成されており、時間に合わせて見て回ることができるようになっている。

巴波川沿いの蔵が保存に向かうのは1975年のことであつた。それ以降、1988年度には「誇れるまちづくり事業」が始まり、また1990年には「栃木市歴史的町並み景観形成要綱」や「栃木市歴史的町並み景観形成補助金交付要領」が制定されるなど、歴史的建造物と町並み景観を整備する規準も定められている。また、旧例幣使街道沿いの万町や倭町などでは、歴史的景観形成ブロックと商業近代化調和ブロックを定め、点としての存在の歴史的建築物の保存・活用を図り、このふたつのブロックから景観的にも、商業的にも特徴ある町並みが形成されている。

栃木市の場合、こうした事業や要綱作り、また修復の助成などは市が行っている点も最も特徴的といえるであろう。伝統的建造物群保存地区となるのではなく、市が独自にまた独力で取り組み、市民も協力していくという行政主導型のまちづくりの例といえる。

参考文献 大河直樹編
「都市の歴史とまちづくり」(学芸出版社、1995)



金沢市民芸術村

(石川県金沢市大和町1-1)

(1) 金沢市民芸術村の概要

JR金沢駅から福井方面に向かい、犀川を渡る手前に広がる約9.7ヘクタールの広大な敷地に建つ旧大和紡績の煉瓦倉庫群を再生利用した「芸術と音楽、演劇」などの練習と発表のための施設。大正から昭和初期にかけて建設された規模や形状の異なる6棟の煉瓦倉庫を改修し、ピット1からピット5と名づけて工房化。「若者を中心に、演劇、音楽、美術、生活文化など多様な創作活動を通して、新しい文化の育成を目指す」場としている。各ピットは回廊で繋がれ、建物の前の広場はセーフティアリア(防災拠点広場)としての機能も持ち、2万6千食の備蓄、飲料となる井戸6基が備えられている。



金沢市民芸術村の外観、広大な敷地の中に建つ

(2) 金沢市民芸術村の歩み

大和紡績金沢工場の倉庫として使われていたが、操業停止に伴い1993年に金沢市が買収、老朽化した工場は取り壊すことが決定していた。解体前に現地視察に訪れた山出保金沢市長が、工場の小屋組みの美しさに感嘆し、市長の提案により転じて再利用が決まった。再利用に当たっては検討委員会を設け、「誰でも1日24時間、1年365日自由に使える芸術文化活動のための工房とする」ことが決定。1996年にオープンした。土地購入費は120億円、建設費13億円、施設費4億円。8年間で200万人の市民が利用している。

(3) 金沢芸術村のシステム

施設の利用に当たっては、市民の自主的な運営管理を基本としている。①市民の経済的負担を少なくする②創作表現の自由を保障すること原則に24時間年中無休、利用の単位を午前(6:00から12:00)・午後(12:00～18:00)・夜間(18:00～0:00)・深夜(0:00～6:00)の四つに区切り、利用料金は各6時間1,000円という破格的値段である。6つの倉庫のうち1棟はレストランとして民間業者に運営を委託、ピット1からピット5までの工房は次のような使用形態となっている。

- ・ピット1(マルチ工房・展示、制作、研修、音楽、演劇などの練習)
- ・ピット2(ドラマ工房・練習、制作、研修、発表)
- ・ピット3(オープンスペース・休憩、交流、鑑賞)
- ・ピット4(ミュージック工房・練習、発表、制作、研修)
- ・ピット5(アート工房・制作、展示、研修)

市民の自主運営を促すために「市民ディレクター制度」を導入、演劇や絵画、音楽などの各ジャンルから2人ずつを委嘱、さらに96人の文化ボランティアを設けている。9人の職員が2交代で勤務しているが、夜は10時まで、深夜は利用者だけとなる。自由の裏には利用者責任があり、「オープン以来、一件の落書きもなく、トラブルもない。利用者たちは自分たちの場所」と思っており、責任とある種の緊張感を持って使ってもらっている」と細川紀彦村長は語っている。

敷地内には、金沢市郊外から移築された農家を交流施設として再生した「里山の家」、城下町金沢の伝統的な職人の技の継承、人材育成を目的とした「職人大学校」が併設されている。

(4) その効果と課題

芸術村の1年間の維持管理費は1億6千万円、自主事業費4千万円、利用料としての収入は2千万円、国からの文化活動支援費2千万円で1億6千万円を金沢市が支出している。しかし、細川村長は「金沢市民一人当たりでは300円台の負担、コーヒー一杯分です。それ以上の効果をあげていると思います」と胸を張る。「伝統を守るためには革新的な試みを行っていかねばならない」という山出市長の信念がその背景にある。芸術村が出来てから、金沢市内の演劇グループが15から30以上に増えた。「真の芸術文化都市にするためには市民ひとりひとりがアーティストにならなければならない」という大胆な試みが芸術村の活動を見ると、現実味を帯びてくる。



金沢市民芸術村の内部、各ピットは利用目的により様々な使い方が出来る

■取材・参考資料

- 1) 金沢市民芸術村村長・細川紀彦氏(2004年11月18日)
- 2) 「金沢市民芸術村」施設概要パンフレット(財団法人金沢芸術創造財団)
- 3) 産業遺産とまちづくり 矢作弘著(学芸出版社)

門司港レトロ地区

(北九州市門司区)

(1) 門司港レトロ地区の概要

北九州市門司港は九州の入り口という立地と港湾としての良好な地形、筑豊から産出される石炭の輸送量の増大などから明治22年(1889)に国の特別輸出港に指定され、日本を代表する貿易港として繁栄を極めた。明治24年(1891)には九州鉄道が開通し、九州における陸上、海上交通の拠点となった。これに伴い大手金融資本や商社が門司港に相次いで進出し、近代的なビルが建てられた。北九州の銀行14行中、9行が門司港に集中した。大正5年(1916)には横浜や神戸を凌ぎ、出入港船舶数が4974隻を数え、全国一の港湾都市となった。



船だまり越しに見る門司港ホテル

しかし、昭和に入ると一転して衰退の時代へと移る。昭和17年(1942)に関門鉄道トンネルが開通、戦後は昭和33年(1958)に関門国道トンネル、同48年(1973)に関門橋が開通し、交通の拠点性が失われ、大陸貿易の減少とともにかつての繁栄の面影はなくなった。歴史的建造物の多くは老朽化し、寂れた港湾風景の中で解体の危機に晒されていた。もはや経済活動の拠点には戻ることのない門司港だが、「風光明媚な関門海峡に臨み、往時をしのばせる歴史的建造物が、訪れる人々に潤いや安らぎを与える」のではないかと昭和62年に就任した末吉興一市長が地域資源を生かした都市観光の拠点として整備を始めた。

事業の目的は、「歴史と自然」を生かし、自治省の「ふるさとづくり特別対策事業」に基づく「門司港レトロめぐり海峡めぐり推進計画」を策定し、ウォーターフロント整備などの関連公共事業と合わせて、この地区を歴史と自然、文化を融合した新しい「都市型観光拠点」として整備し、活性化を図るとともに、そこに住む人々が親しみと誇りを持つ地域に再生することとしている。

事業コンセプトは「衰退する門司港の活性化」。

- ① 歴史のいきづく大正ロマンのまち
- ② うるおいと活気に満ちたウォーターフロント
- ③ 特色ある文化創造の拠点。

(3) 門司港レトロ地区のシステム

レトロ地区の整備事業は第1期300億円、第2期300億円という大きな事業費で進められている。北九州市が実施主体であり、行政主導のプロジェクトである。順調に進んでいるようだが、危機的状況が何度もあった。レトロ地区散策の拠点ともなるJR門司港駅は東京駅よりも早く国の重要文化財に指定された建物だが、昭和58年に解体の危機が訪れた。左右対称のネオレネッサンス様式の端正な木造建築。構内には関門連絡線の連絡通路跡もあり、門司の繁栄の記憶を伝える貴重な近代化遺産である。門司の住民たちは残すための住民運動を展開し、補修費3300万円のうち1200万円の寄付を集めて、保存を実現させた。旧門司三井倶楽部、大阪商船ビルも解体話が持ち上がった。昭和54年に策定された港湾整備計画がレトロ構想と同時に進行しており、かつて船舶を係留していた船だまりは全面埋め立てられることになっており、岸壁に建つ旧門司税関の赤煉瓦建物も取り壊される運命にあった。絶体絶命の状況から差ししのべられた救いの手は国のふるさとづくり特別対策事業の創設であった。昭和63年に同事業に採択された「門司港事業は動き出したのである。事業を進める企画課と港湾局との軋轢はしばらく続いたという。



国重文の門司港駅

現在、レトロ事業は北九州市経済文化局門司港レトロ室が担当している。JR西日本の職員も出向し、13人のメンバーがいる。平成7年には、同地区の観光振興と地域の活性化を地元・民間・行政が連携し、一体となって推進しようとする「門司港レトロ倶楽部」が発足している。参加団体は次のとおり。

- (行政) 経済文化局、港湾局、教育委員会、門司区役所
(民間) 北九州市観光協会、JR九州門司港駅、北九州商工会議所、北九州活性化協議会、北九州コンベンションビューロー、NTT西日本北九州支店、門司港開発(株)、門司港郵便局、九州電力門司営業所、出光美術館
(地元) 門司まちづくり21世紀の会、門司みなと商店街振興組合、門司の躍進を考える会、門司港パナナの町いき売り保存会、まちづくり活性化もじ、門司の景観を考える女性の会、門司みなとまち倶楽部、門司の町いき売り保存会、まちづくり活性化もじ協会

(2) 門司港レトロ地区の歩み

事業は第1期(昭和63年～平成6年)と第2期(平成9年～)として推進されている。

第1期には、歴史的建造物の保存と活用として、旧門司三井倶楽部(国重要文化財)移転修理、JR門司港駅(国重要文化財)の補修、駅前広場の整備、旧大阪商船ビルの修復などが行われた。また、レトロプロムナードの整備や電線地中化、海峽めぐり回遊路、展望台の建設などの環境整備が行われた。



旧大阪商船ビル、内部はギャラリーになっている

その他、大連歴史的建造物建設事業、船だまり「親水護岸広場」の建設、「はね橋」の建設、旧門司税関の修復、レトロ業務ビルの建設など。

第2期は、門司港地区全体の観光振興を目的に、滞在型観光拠点の整備や快適居住環境の創造を中心に事業が現在も進行している。

主な事業として、回遊性の向上・滞在時間の長時間化させるための、

- ① 門司港レトロ展望台の整備
- ② 夜間景観の整備
- ③ サイクリングロード・遊歩道の整備
- ④ 観光列車の運行
- ⑤ 多目的ホールの整備。

地元商店街の活性化・民間投資の促進として、

- ① 観光土産館の整備
- ② 既存商店街とレトロ地区を結ぶ道路整備
- ③ 駐車場、トイレの整備。
- ④ 門司港ホテルの整備
- ⑤ 海峽プラザの整備
- ⑥ 出光美術館の開館
- ⑦ 海峽ドラマシップ、九州鉄道記念館の開館
- ⑧ 関門海峡ロープウェイ構想の支援。

これらが重層的に手がかけられ、門司港に新しい魅力が生まれている。

(4) その効果と課題

右記表のように、レトロ事業の効果は絶大である。

今後の課題として、下関市との広域連携を見すえた「関門海峡」のブランド化推進や情報・相談窓口の一元化と民間管理体制への転換、民間化によるまちづくりと観光マインドの育成などを挙げている。

	平成7年度	平成15年度
観光客数	107万人	255万人
(内)宿泊観光客数	12万人	36万人
駐車台数(普通)	4万台	15万台
駐車台数(バス)	3千台	1万8百台
レトロ地区店舗数	3店舗	60店舗
売上額	約3億円	約47億円
雇用者数	約30人	約670人

門司港レトロ倶楽部の概要については、北九州市門司港レトロ室の田澤智明氏並びに山本香緒里氏から話を伺ったが、レトロ地区をこまごま事業化してきた先賢行政マンたちへの畏敬の念がこの事業に携われる誇りが感じられ爽やかなものであった。

レトロ地区は埋め立てを免れた船だまりの周囲を回遊するように近代化遺産の建物が配置されているが、ギャラリーや喫茶店といった画一的な使い方が多い。また、課題にあげられている民間の人たちの姿があまり見られなかったことも気になるところだ。廃校になった小学校を開放した「門司港アート村」のアーティストのギャラリーが旧大阪商船ビルの二階にあるが、門司の人たちのものづくりや生活がレトロ地区に見えてくると、さらに精彩に富んでくるような気がする。



門司港駅の切符売場もレトロ調になっている

■取材・参考資料

- 1) 北九州市門司港レトロ室・田澤智明氏、山本香緒里氏(2005年2月10日)
- 2) 門司港レトロ地区の歩みと展望(北九州市門司港レトロ室)
- 3) 海峽のまち門司港レトロ物語(北九州市・財)北九州都市協会)
- 4) 産業遺産とまちづくり 矢作弘著(学芸出版社)